PART2　識別の応用（に）

4　「　　」＋に
- 断定の助動詞　※次ページ「断定」参照
- 格助詞　（「である」と訳せない）

（例）天の川といふ所**に**至りぬ。

※**断定**

● **に**＋（助詞）＋

（例）いかなる天魔(てんま)の仕業(しわざ)**に**てありけむ、…

〔注〕女、野にありて…

● **に**

（例）同じこと**に**や。

5「形」＋**に**
- **断定**の助動詞　※前ページ「断定」参照
- **格助詞**
- **接続助詞**

※断定

（例）さるべき**に**やありけむ、…

※格助詞

連体形＋**に**　述部

（例）尼君の見上げたる**に**、少しおぼえたるところあれば、（少女は尼君の）子なめりと見給ふ。

※接続助詞

連体形＋**に**、～

⇒ 「　　　」「　　　」「　　　」で訳せる。

（例）（女房が格子を）上げちらしたる**に**、雪降りにけり。

〈Memo〉

第25講　PART2　確認問題

①　傍線部の文法的説明として最も適当なものを、次の中から選べ。

かくうたふを聞きつつこぎ来るに、黒鳥(くろとり)といふ鳥、岩の上にあつまりをり。

ア　格助詞　イ　接続助詞　ウ　完了の助動詞　エ　断定の助動詞
オ　動詞の活用語尾　カ　形容動詞の活用語尾

②　傍線部の文法的説明として最も適当なものを、次の中から選べ。

三尺の御几帳のうしろにさぶらふに、絵などとり出でて見せさせ給ふを、手にてもえさし出づまじうわりなし。

ア　格助詞＋動詞の連体形＋接続助詞
イ　接続助詞＋動詞の連体形＋接続助詞
ウ　接続助詞＋動詞の終止形＋格助詞
エ　格助詞＋動詞の終止形＋格助詞

③「思ひなしにや、…」の傍線部と文法的意味・用法が同じものを、次の中から選べ。

ア　みな人ものわびしくて、京に思ふ人なきにしもあらず。
イ　ここだくも狂ひに狂ひ思ほゆるかも
ウ　火の中にうちくべて焼かせたまふに、めらめらと焼けぬ。
エ　鬢は失せにたれば、ひたぶるになし。

④　傍線部のうち、一つだけ品詞が異なるものを次の中から選べ。

ア「一夜(ひとよ)の門(かど)の事、中納言に語りはべりしかば、…」
イ「定めてならひあることに侍らん。」
ウ　朝夕の宮仕へにつけても、…
エ　いかでこの男にものいはむと思ひけり。

⑤　傍線部について、文法的に正しい組み合わせを、次の中から選べ。

いづれの御時(おほんとき)aにか、女御(にょうご)・更衣(かうい)あまたさぶらひたまひけるなかbにいとやむごとなききはcにはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。

ア　aとbが同じ　　イ　aとcが同じ　　ウ　bとcが同じ　　エ　すべて同じ　　オ　すべて異なる

第25講　PART2　確認問題　解答

〔解説〕

① 連体形に接続し、「〜すると」と訳すことができ、下に文が続いているので接続助詞。よって、イが正解。

② 一つ目の「に」は体言に接続するので格助詞。「さぶらふ」はハ行四段活用動詞の終止形か連体形であるが、終止形に接続する「に」は存在しないので連体形。二つ目の「に」は「〜すると」と訳すことができ、下に文が続いているので接続助詞。よって、アが正解。

③ 「にや」の「に」は断定の助動詞。アは、連体形に接続し、「に」の下に「あらず」とラ行変格活用動詞の「あり」がある形から断定の助動詞。よって、アが正解。

④ 選択肢はすべて体言に接続しているが、イは下に「侍らん」とラ行変格活用動詞の「侍り」があるので断定の助動詞。他は下に「あり」や「はべり」がなく、「である」と訳すこともできないので格助詞。よって、イが正解。なお、アは「に」と「はべり」の間に動詞「語り」があるので、断定の「に」＋「はべり」ではない。

⑤ a・b・cはすべて体言についているので、断定の助動詞か格助詞かで判断する。aは「にか、」の形なので「に」は断定の助動詞。bは下に「あり」や「はべり」がなく、「である」と訳すこともできないので格助詞。cは下に「あらぬ」とラ行変格活用の「あり」があるので断定の助動詞。よって、イが正解。

〔解答〕

①　イ

②　ア

③　ア

④　イ

⑤　イ